



天平のひろば

2023 年 7 月発行

87 号

☎/Fax 0742-34-7713

e-mail : npoheijyou@yahoo.co.jp

http://www.heijyonet.nara.jp

NPO法人平城宮跡サポートネットワーク（NPO平城宮跡）

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1 奈良文化財研究所内

第 22 回通常総会 令和5年度事業計画を承認

NPO 平城宮跡は、5 月 27 日に第 22 回通常総会を開催。会員総数 140 名のうち出席 45 名、委任状 57 名で総会成立。令和 4 年度事業報告、令和 5 年度事業計画および、第 12 期役員が承認されました。

1. 活動の基本方針



当会は平城宮跡の歴史的・文化的価値の維持・保全に寄与することを事業の方向性として活動してまいります。

その上で、平城宮跡歴史公園の利活用を積極的

に対応するため、「歴史公園ガイドや平城京歴史講座」に取り組み、朱雀門ひろばを起点に「奈良時代を今に感じる」諸活動を引き続き進めます。

特に、平城宮跡における最初の本簡が発見された日を「本簡の日」と提唱、これを啓発する活動と、近年発見された「かりうち」の普及という文化・ガイド事業活動に取り組みます。また、宮跡を訪れる人々に最適な空間を提供するため、環境保全活動に一層、積極的に推進してまいります。更に「天平のひろば」紙面の充実を図ります。

奈良文化財研究所、平城宮跡管理センターはじめ、関連団体と協働して事業を推進し、平城宮跡の保存と利活用に努めてまいります。本年はこれまで 22 年間の活動成果を踏まえ、ポストコロナを見通して、新たな時代に対応する NPO 活動に取り組むスタートの年とします。

2. 今年度の主な事業計画

(1) NPO 平城宮跡会員の増加と会の経営基盤の強化に努めます。

NPO 会員の新規加入の促進に努めるとともに、事業運営の効率化を推進します。

(2) 宮跡を最適空間に創出するため、環境保全活動になお一層、取り組みます。クリーン活動、

緑の保全活動、見守り活動に加えて、景観保全活動にも取り組みます。

(3) 組織の充実と人材の確保に努めます。

NPO 関連事業の拡大・多様化に積極的に取り組むための組織と人づくりに努めます。

(4) 関連団体との協働事業の推進を図ります。

奈良文化財研究所はじめ平城宮跡管理センターなどと協働して、教育活動やガイド、文化事業に取り組み、平城宮跡の歴史的・文化的価値の情報発信に努めます。

(5) 広報活動を充実強化します。

天平のひろばの紙面を充実、ホームページを拡充して、積極的に情報発信します。

(6) NPO 平城宮跡 22 年の活動成果を踏まえ、新たな NPO 活動の在り方を検討します。

期待される NPO 活動の在り方について、奈良文化財研究所の指導を得て検討します。

3. 新型コロナ禍における事業計画の執行について

新型コロナ対策のため諸事業の実施について、今後の事態の推移を踏まえつつ、事業実施を弾力的に運用してまいります。

4. 第 12 期役員の選任について (50 音順)

理事：相羽洋士、大山達夫、岸本康興、河野健二、鈴木浩、仁木美津子、三宅敦夫

監事：磯田正昭、水野貞雄

相談役：伊部和徳、宮繁壽夫

(任期：令和 5 年 7 月 1 日～令和 7 年 6 月 30 日)



奥村典康平城宮跡管理センター室長の交流会スピーチ

(編集部)

第 22 回通常総会の交流会において、本中眞奈良文化財研究所長より NPO 平城宮跡に感謝文が送られ、元平佳作研究支援推進部長により代読されました。

以下に全文を掲載いたします。(編集部)

令和 5 年 5 月 27 日

NPO 平城宮跡サポートネットワークへの感謝文 奈良文化財研究所長 本中 眞

常日頃から、本研究所が実施する各種事業にご理解ご協力を賜りまして、誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。

また、2001 年 11 月に NPO 法人平城宮跡サポートネットワーク (NPO 平城宮跡) が設立されてから 20 年以上もの歳月が過ぎましたが、この間、関係の皆様が積み重ねて来られた並々ならぬご努力と多大なる成果を思うとき、深い感謝と称賛の気持ちを禁じ得ません。

貴法人は、平城宮跡の歴史的・文化的な価値の継承のみならず、教育・文化の普及、観光の振興、そして良好な環境維持のために行う定期的な清掃・パトロールなど、多岐にわたる地道な活動に日々ご尽力されてきました。

こうした長年の活動により、我が国の歴史・文化遺産の保護に大きく貢献されたことから、2013 年には団体として初めて文化庁長官表彰を受けられたわけです。そのような貴法人の大いなる実績を踏まえ、活動の基盤を担った歴代理事長をはじめ会員の皆様方の御努力に対して、深い敬意を表する次第です。

本研究所も 2001 年に独立行政法人となって以降、「平城宮跡」に関わるさまざまな事業を通じて、貴法人とともに歩んでまいりました。

特別史跡に指定され、世界文化遺産にも登録されている「平城宮跡」の価値は、貴法人が日頃の活動を続けられてきたからこそ、現在もなお万全な状態を維持しているのだ、と言っても過言ではありません。

その 20 年以上にわたる活動の成果は、「天平のひろば」と名付けられた定期広報紙を通じて、今や市民に広く知られています。

復元された大極殿や朱雀門を遠くに望み、往時の風景と今を重ね合わせることができるのも、皆様が日々「天平の語りびと」として関わっていただいているからこそその賜物であると私は実感しております。

引き続き、平城宮跡サポートネットワークの新たな

未来に向けた発展とともに、皆様の御健康、御多幸を祈念し、私からの感謝の言葉とさせていただきます。

本日は、大変ありがとうございました。



奈良文化財研究所 元平佳作研究支援推進部長

本中所長の感謝文にお応えして

NPO 平城宮跡 相談役 伊部和徳

この度は、図らずも本中奈良文化財研究所長より身に余る感謝文を頂き一同恐縮しております。

顧みれば発足時は NPO 法人の設立・運営など全く経験のない解説ボランティア有志の集まりで甚だ心もとない状況でしたが、奈文研の絶大なるご指導とご支援を頂きスタートして既に 23 年目になりました。

当時の宮跡は、至るところに弁当殻や飲み物缶などが散乱し、時には夜間に紛れて不要になった家電製品や産廃らしきものまで不法投棄されていました。中でも難物は朱雀門近くに普通乗用車が 1 台放置されていました。それらの処分や清掃が大きな課題となり NPO 法人設立の直接の動機となりました。

当初は NPO のひとり相撲の状態でしたが、平城遷都 1300 年祭を機に、宮跡に対する意識も環境も大きく変化し、行政はもとよりマスコミや市民から大変注目されるようになりました。

活動部門も発足時は「環境保全、教育文化、広報」の 3 部門でしたが、国営公園化後は復原事業情報館やいざない館、大極門などの「ガイド活動」も担当することになり、近年は樹木の剪定など「緑の保全活動」と幅広く展開することになりました。

今後も奈良文化財研究所をはじめ国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所、奈良県など関係機関のご指導とご協力を得ながら平城宮跡の歴史的文化遺産の価値と保全に寄与することを目的に、更に未来に向けて活動を推進したいと思います。

この度は大変ありがとうございました。

聖武天皇の生涯

—その即位まで—

寺崎保広

(奈良大学名誉教授)



5月27日NPO平城宮跡総会前に第47回平城宮跡歴史文化講座が平城宮跡資料館講堂で行われ131名の参加で「聖武天皇の生涯～その即位まで～」と題し講演。

696年に持統の後継者を決める話し合いが行われ、父から子への直系相続の「原則」が謳われ、軽皇子が立太子、異例の若さで、翌年即位した(文武天皇)。律令に通じる藤原不比等が台頭してくるのはこの頃で、長女の宮子(聖武母)を天皇の妃に入れ、歴代の天皇に仕えていた縣犬養三千代を妻に迎え、その威光も得て地盤を固める。701年「大宝律令」を制定、文武長子の首皇子(聖武)と後に皇后となる光明子もこの年誕生。

702年に持統が死去すると、文武と首皇子を支える身内は、文武の母の阿閑皇女(元明天皇)、義父不比等、側近の三千代ということになった。

707年6月15日、天皇(文武)崩ず、と突然「続日本紀」に現れる。きわめて異例のことだが、元明即位の宣命には、前年11月に文武から「病氣なので譲位したい」と表明され、固辞したが譲位を承諾したとある。その日は文武死去と同じ日、本当だろうか。これまで文武は、あらかじめ、母である阿閑皇女に譲位し、その後首皇子へ皇位をつなぐレールを敷いた上で亡くなったとされてきた。譲位の表明の記事を否定して、文武死亡前の「続日本紀」を読むと、この皇位継承の経緯に修正を迫ることとなる。

文武は706年9月には「平城の地」を下見し、707年2月に遷都の事を論議させたとあり、遷都の具体案を検討させていると解される。また4月には不比等に多数の封戸(封禄)を与え、後事を託したと思える節もある。こう見みると、707年2月までは、文武は元気で、平城遷都の構想も、やる気満々だったのではないかと。急いで後継者を決める必要があったが、文武の男子は7歳の首皇子のみ。年長の天武の男子が4名存命で、皇位が別系へ移る可能性もあった。慎重に事を運ぶ必要もあり、同じ4月には阿

閑皇女を皇后の扱いとする措置がとられ、皇女が即位の有資格者(皇后)である条件を整えている。結局、阿閑皇女が即位し元明天皇となった。前年11月の譲位表明は、皇位を「原則」通り直系の首皇子に引き継ぐため、中継ぎの元明に、円滑に譲位された事を示すために、後に挿入されたのではないかと考えられる。平城遷都(710年)などを主導してゆく。平城京は「文武の都」として造り始められたが、「やがて即位する首皇子のための都」ととらえられるようになった。714年に首皇子は立太子、光明子が妃に。715年には元明が引退、首皇子はまだ若いとして、伯母の氷高内親王(元正天皇)が即位。724年には元明、藤原氏宿願の首皇子の即位が実現し、聖武天皇となった。(編集部)

平城宮跡歴史文化講座(次回)

10月上旬: 渡辺晃宏(奈良大学教授)

「聖武天皇の生涯—あいつぐ遷都」

天平祭

5月3日～5日の天平祭は朱雀門ひろばで天平衣装を新調して臨み、古代瓦の拓本づくり(101名)、古代のすごろく“かりうち”は(200名)を超える人たちが楽しみました。何れもこれまでの体験者数を更新、行列ができるほど好評でした。



古代瓦の拓本づくり(天平祭実行委員会撮影)



盤上ゲームかりうちの様子

(文化・ガイド部会)

好評 平城京 歴史講座

米川裕治さん（橿考研企画学芸部係長）が4月8日92名に「薬師寺東塔の発掘調査」と題し講演。



薬師寺東塔は明治の修理のもの。基壇外装の石材を取り外すと、正保年間（1644年～）の基壇外装、それを取り除くと創建時の版築土と、凝灰岩の外装が現れた。堀込地業（整地）、版築、基壇外装、階段、雨落溝、石敷などが完存していた。堀込地業の発掘時には「和同開珎」が出土。今のところ、最古の貨幣を用いた地鎮供養の事例と考えられている。

版築部分、特に心礎の周りでは、地面を突き固めた棒の痕跡が、はっきりと密に残っていた。また現在の階段は西面のみだが、創建時には、東西南北4面の階段があったことも確認できた。改装の度に外側に外装が付け足されていったため、基壇の核となる版築部分は、手つかずのまま1300年前の稀有な姿を見せてくれたのである。

版築部分、特に心礎の周りでは、地面を突き固めた棒の痕跡が、はっきりと密に残っていた。また現在の階段は西面のみだが、創建時には、東西南北4面の階段があったことも確認できた。改装の度に外側に外装が付け足されていったため、基壇の核となる版築部分は、手つかずのまま1300年前の稀有な姿を見せてくれたのである。

37基の礎石は西側が20cmほど沈み込んだ「不同沈下」が見て取れた。にもかかわらず東塔は斜塔になっていない。東塔の建っている場所は標高の低い所で、発掘時には特に西側で湧水が多く、地下に水の通り道ができ、発掘後埋め戻した砂が流されるなど沈下しやすい状況だった。創建時も同様だったと推測でき、建物を建てる段階では、すでに不同沈下を起こしており、その上に塔が建設されたと考えられる。その後は大きく傾くことなく、流麗な姿を今に伝えることとなった。（編集部）

井上さやかさん（万葉文化館企画研究係長）が5月13日95名に「平城京の万葉歌」と題し講演。

その内取り上げられた歌の一部は次の通り。



・「飛鳥（とぶとり）の明日香の里を置きて去（い）なば 君があたりは見えずかもあらむ」（歌番号78）この歌は、

平城京遷都時の太上天皇（上皇）の御製と歌の題詞で説明されている。住み慣れた所から新しい所へ赴く気分をよく表しているが、どうもつじつまが合わない。藤原京から奈良の地へ来るのに、明日香を後

にするというのはおかしいし、そのとき元明天皇は在位中で上皇はおられない、誰が作った歌なのか（上皇といえば持統では？）。万葉集の題詞や歌に詠まれている事柄は歴史的な事実として、額面通りには受け取れない。万葉集は、歌が伝承を記憶しておく手段や、歌謡だったことから、和歌として、芸術性をもった文学作品として詠まれるようになっていくと、事実から離れて表現されることも出てくる。表現が適切なら古い時代に作られたものをリバイバルさせて、新しい意味合いで歌われることもあった。

・「梅柳過ぐらく惜しも佐保のうちにあそばむことを宮もとどろに」（949）奈良時代に入ると、どんな景色が広がっていたかを見る。この歌からは、梅や柳を愛でること、大勢で春日野に集まって遊ぶことが「楽しみ」なっていることがよくわかる。もっともこの歌は、みんなで春日野に遊びにいった留守にしている時に、天皇の不徳をとがめるものとされる雷鳴が轟き、大騒ぎになり、宮中にいるべき侍従や舎人が、処罰として外出禁止にされ、そのため遊びに行けない口惜しさをうたったもの。あまり都合のいい話でもないためか、あえて読み人知らずとしたものと思われる。

（編集部）

永澤拓志さん（木津川市教育委員会文化財保護課課長補佐）が6月10日101名を前に「恭仁宮について」と題し講演。



天平12年（740）に聖武天皇は天然痘や藤原広嗣の乱に見舞われ、社会不安が全国的に高まっていた事態を一新するため、平城京から遷都を決意し、山背国恭仁卿を新しい都と定めしました。

この間、諸国に国分寺・国分尼寺建立や墾田永年私財法の重要な政策のほか、紫香楽宮で大仏造営にも取り掛かっています。恭仁宮は42畝と平城宮の120畝と足利健亮博士の想定とやや小さいが、木津川市の加茂地区には「左京」、木津・山城地区には「右京」が設けられたようです。天平16年（744）難波宮に遷された後、天平18年（746）宮跡の中心

部分、大極殿は、平城宮跡第一次大極殿を移築したものとされています。以後、山城国分寺金堂として再利用され、新たに七重塔が造営され、今でも塔跡の土壇の上に15個の大きな礎石が残されています。昭和32年「文化財保護法」の史跡指定で恭仁京は抜け落ち「幻の都」といわれていました。史跡整備活用・公開の計画と発掘調査及び研究を今後も推進する必要があります。

恭仁宮大極殿跡に南設して立地する、恭仁小学校は瓶原（みかのほら）のシンボリック建物で木造校舎自体の文化的価値も高く、地域資産として今後の史跡活用計画との整合を図る必要があります。また、恭仁宮・京の周辺景観は、万葉集でもよく詠われ、浄瑠璃寺、岩船寺、海住山寺、高麗寺跡、当尾の石仏など、生活の周辺は、大きく改変されることなく今に至っています。さらに、地域づくり「京都ろばた懇談会」でも良好な周辺環境を含め、一体的に保存方針を定めているところです。（編集部）

平城京歴史講座(いざない館)

7月8日：菊井佳弥（奈良市埋蔵文化財調査センター学芸員）「高級貴族の邸宅の調査-平城京左京三条三坊四坪の調査成果から-」

8月19日：服部光真（元興寺文化財研究所主任研究員）「元興寺の創建-日本仏教のはじまり」

新役員のご挨拶



理事に選任いただきました河野健二です。

平城京とその時代を生きて来た人々のことをもっと知りたいと思い入会いたしました。

今回、環境保全部会を担当することになり、あらためて先輩たちの多大な努力によって、今の平城宮跡全体は美しく、清々しい場に保たれているとおもっています。まだ日も浅く、勉強させていただくことばかりですが、平城宮を守り、その魅力を発信することに微力ながら、お役に立ちたいと考えています。皆様がたのご支援をあわせてお願い申し上げます。

あちこち見て歩き ⑦ 浄教寺を訪ねてⅡ

-奈良の諸君に告ぐ！-

JR 奈良駅前広場から、奈良市街三条通りを東に辿ると程なく左側に、山門越しに樹齢三百年程の見事なソテツの古木に視線が釘付けとなる古刹が、静かに佇んでいる。鎌倉時代開基の歴史を持つ「浄土真宗本願寺派・九条山浄教寺」です。



浄教寺本堂とソテツの古木

明治時代の王政復古や文明開化の激変期には、多くの副作用が伴いました。その一つに日本古来の伝統や文化が軽んじられ、当時の国家の施策「神仏分離」が拡大解釈され俗に言う「廃仏毀釈」の誤解から多くの仏像や美術品、寺院までが消失しました。当然、政府もそんな愚挙を防止するため、調査や対策を講じましたが、中でもアメリカ人哲学者「アーネスト・F・フェノロサ」と「岡倉天心」による奈良の古社寺の調査は私達もよく知るところです。その調査結果を元に、明治21年6月5日、浄教寺本堂に於いて「奈良の諸君に告ぐ！」と題して講演を行いました。

欧米型近代化を急ぐ余り、伝統的文化を軽んずる無知さや愚かさ加減に、大きな一石を投げ目覚めさせた場所として、現在、浄教寺では定期的に「フェノロサ讃仰記念講演会」を開催して当時の偉業を思い起こすとともに、今後も語り継いで行きます。

下に、フェノロサの講演要旨の中から、取り返しのつかない愚行を戒め、日本文化の素晴らしさと誇りを大切にすべきとした一文を抜粋します。

『この奈良に存在せるところの古物は、一人奈良一地方の宝のみならず実に日本全国の宝なり。いな日本全国の宝のみならず世界に於いて、また得べからざるの至宝なり。故に余は信ず。この古物を保存護持するの大任は、すなわち奈良諸君の宜しく尽くすべき義務にて、また奈良諸君の大なる荣誉なりと。』

（磯田正昭）

かき なか けん じ
垣 中 健 志

都城発掘調査部平城地区史料研究室研究員



1989年大阪府生まれ。
2012年東京大学文学部卒業、2014年同大学院人文社会系研究科修士課程修了、2017年3月同博士課程単位取得退学後、2017年4月千葉県教育委員会

文化財主事を経て、2021年1月奈文研同研究室に就職し、現在に至ります。

垣中さんは、正倉院文書や木簡などの分析を通し、奈良時代における王族・貴族の家政機関の実態の研究を行ってきました。また、これからの文化財保護制度のあり方についても関心があります。

史料研究室では文字資料を研究の対象として遺跡の性格を理解するための文字資料を収集・検討するとともに、出土した文字資料の釈読にあたっています。日々の業務は“木簡”の釈読はもちろんのこと、整理・保管から公開・活用に至るまで担当し、現在もっとも比重の大きい仕事になっています。最近では、興福寺東金堂院北面回廊の発掘調査を担当し、回廊の建物と基壇の規模・構造、その再建と変遷の様子をあきらかにしました。調査の成果から、史料や絵図に描かれている様相と近い状況であったことを示し、従来の伽藍復元案よりも東金堂院の規模が大きくなると推定しました。平城宮・京跡には未だ見ぬ木簡たちが、たくさん眠っています。最初の木簡出土から約60年経った今、“荷札木簡”を自身の調査で発掘し、その感動は忘れないという。

またデジタル技術による木簡の活用は目覚ましく市民参加型「ナゾルクン」は、ゲーム感覚で古代の文字文化を体験できます、さらに「ニコニコ美術館」や「なぶんけんチャンネル」の活用などチャレンジは続くと未来を見据え熱く語っていただきました。

さらに資料館で若者へのガイドの接し方には一つ方法があると明快に伝えていただき、千葉にもオオタカがいると野鳥の観察が趣味なのか、野球は復興神戸オリックス“イチロー”に関心があると楽しく話されました。

(編集部)

平城宮跡を“楽しむ”人たち

桜 みまもり隊が発足

平城宮跡にはソメイヨシノを中心に214本の桜があります。

クビアカツヤカミキリのフラス（幼虫の糞や木くず）を見つけ桜の木の内部を食い荒らすのを防ぐため早期発見と駆除が必要で5～10月（毎月4回）9時～11時、パトロール（約120本、4グループ8人）がスタートしました。

これまで楽しませていただいた桜なので暑い時ですが地道に見守ります、という。（緑の保全部会）



木くずや害虫がいないかパトロール中

新規会員の紹介/募集

新規会員の紹介 (7月1日現在)50音順。

秋穂英子さん、秋穂安寛さん、嘉瀬雪子さん、桑田尚宏さん、桑田由紀子さん、河野良子さん、水谷理恵子さん、吉松康彦さん、渡辺ふみ子さんの9名が入会しました。

新規会員の募集

平城宮跡を活動の拠点に！楽しいひとときを過ごしませんか！歩くも良し、走るも良し、野鳥や植物の観察も良し、掃除をしたい、ガイドをしたいと、平城宮跡が大好きな皆さまのお助けが必要です。〈活動の支援/入会のお申し込み〉

❖個人が支援/活動。年会費 3000円

❖法人が支援/活動。年会費 10000円

◆お申込みなど ☎/Fax : 0742-34-7713

にご連絡願います。

編集後記

コロナ禍が過ぎ“熱中症に要注意”の今日この頃。こまめな水分と塩分の補給は欠かせません。（萱鼠）